



## 告知

### 対人援助学会第4回大会

は2012年12月8日(土)

神奈川県立保健福祉大学(横須

賀市)で臼井正樹大会長の下、

開催です。詳細は次号で!

編集長(ダン シロウ)

200頁程のこんなカラー版マガジンが、大したコストもかからずに簡単にだしてしまうのには相変わらず驚きがある。そして、それがやろうとする気持ちひとつだというのには、もっと喜びがある。

何かが実現できるかどうかには、様々なファクターがある。同様に、何かがなかなか実現できないのにも、多様な要因がある。それを私は、結局は意志の問題だと思っている。

「生物の進化過程において、速く走りたいと思ったものが馬になった!」という非科学的かも知れない考え方が好きだ。この雑誌の試みも同じ事だと思う。

だから、若い世代の人達に、行動基準の中心に意志をおいて、成功するか失敗するかは時の運であり、それを支配することなど誰にも出来ないという覚悟を決めたら、あらゆる事は、やるか、やらないかだけだと伝えておきたい。

そしてやってみたら、案外上手いくものなのだ。扉は開きたくて、叩かれるのを待っているのかもしれない。

いよいよ次号が第10号。正直ここまでやれる

とは思わなかった、と書いた方が可愛いのだろうが、残念ながらそんなことはなく、最初から当然だと思っていた。

執筆者の一人、サトウタツヤさんは遅れの無い定期刊行に感心してくれているが、「手段が整っていたら、きちんとやれるんだよ私たちは!」と、誰にというわけでもないが、そう言いたい気分だ。

でもやっぱり大したもんだ。執筆者の皆さん、有り難うございます。

編集員(チバ アキオ)

「はい、これ!」いつも通り出勤した施設で利用者の方がチラシをくれた。普段そういうことをしない方だったので「ナニ?ナニ?」と思ってチラシをみると「被曝ジェノサイド!放射能バラマキ絶対反対!」ととても勢いのある字で書かれた見出しがでかかど書かれているのが目に飛び込んできた。それは被災地のがれきの受け入れを反対している人たちが印刷、配布したもので、その中を読んでいると、がれきを受け入れた場合、がれきの処理をする清掃工場の近くの地域に影響が出るというものだった。そこには、処理する施設から一番近い福祉施設として私の勤める施設が実名入りで掲載されていた。...って、いきなり当事者???そうなんです。こういうことを経験する、今の「時代」の雰囲気を感じます。時代に影響を受けたもの、受けていないものがあるならば、対人援助学マガジンは後者に重きを置いているマガジンだと考えています。それこそがこのマガジンのアイデンティティだとあらためて思います。

## ご意見・ご感想

マガジンに対するご意見ご感想は

[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

学会時にも販売しましたが印刷版対人援助学マガジン(1号~8号各1000円・全巻統一価格にしました)が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。メール便で発送します。

## マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438  
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

# 対人援助学マガジン 通巻9号

第三巻 第一号

2012年06月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第十号は2012年9月15日

発刊の予定です。

原稿締め切りは8月25日！

執筆の方はスケジュール表に

記入を！

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1  
立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1  
リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

## 表紙の言葉

このイラストは映画「君に読む物語」の短文の挿絵として書いた。

映画はDVDで、かなり偏見たっぷりの先入観を伴って観た。そしてまあ、そんな物語だったのであるが、反省した。

心が動いたのである。ありそうな、いかにものお涙ちょうだい、老人の愛物語なんてと思っていたのにである。

自分が歳をとってきたせいかもしれない。人は勝手なもので、自分がそこに近づくと、了解度がアップしたりする。

夫のことが分からなくなる妻、これが何とも切ない。その妻に、何度も何度も自分たちの若い頃の恋物語を読み聞かせる夫。

しかし「美しい物語・・・」とは言ってくれるが、それが自分たちの物語であることは記憶からこぼれ落ちてしまっている。

映画の老女は、つかの間、記憶を取り戻すのだが、又忘却の中に行ってしまうのだったようだ。

そうだったかなあと本も読んだのに記憶がおぼろげだ。私が惚けてどうする。

ま、そのような話だったんじゃないかと思うが、歳をとってきて、いい加減なことばかり言うようになっているから仕方がない。そんな話の映画であってもなくても、支障はないでしょう。

2012/06/15 団士郎